1959年版小冊子『フルシチョフ秘密報告』のテキストに関する一考察 ——ソ連共産党公式テキスト（1989年公表）と比較して——

角 田 安 正

（防衛大学校教授）

A re-examination of Khrushchev's secret speech booklet allegedly published in Moscow in 1959: A comparative textual analysis with the official 1989 text and the US Department of State's 1956 edition

TSUNODA, Yasumasa

Professor, National Defense Academy

Abstract

This paper compares three versions of Nikita Khrushchev's secret speech: a Russian booklet that was allegedly published in 1959; the official Russian edition, published in Moscow in 1989; and the US Department of State's version, published in English in 1956. This paper argues that although the booklet of 1959 was a forged imprint, its text cannot be summarily dismissed as false.

The official text of Khrushchev's speech, delivered to the closed session of the 20th congress of the Communist Party of the Soviet Union on February 25, 1956, was published by the party in 1989. A note at the end of the text mentions that it is identical to the original text from March 1, 1956 (not to the text of February 25, 1956).

The US Department of State's version of the speech was printed in the *New York Times* on June 5, 1956. The text is identified as being a direct or secondary translation of the official text from March 1. Subsequent newspapers reports and research findings from the mid-1990s reveal that the original text had first passed through the hands of the Polish United Workers' Party before reaching the Israel Security Agency, and finally the United States.

By comparing the text of the 1959 booklet, the official 1989 edition, and the US Department of State's version concurrently, we observe the following:

- (1) The 1959 edition of Khrushchev's secret speech is a variant of the original version from March 1, 1956.
- (2) A number of subtle differences in wording exist between the 1959 edition and the 1989 edition; however, these differences are so minor that they are unnoticeable in the Japanese translation.

Keywords: Khrushchev's, secret speech, the 20th congress of the CPSU, the Polish United Workers' Party

- (3) Despite these differences, the “precision” or “accuracy” of the 1959 edition is only slightly inferior to the version produced by the US Department of State. If the US Department of State’s version differs from the official one by only 5 percent, the 1959 booklet differs from the official version by approximately 7-8 percent.
- (4) We present the following hypothesis to explain why the 1959 version is less accurate than the version produced by the US Department of State. Both the US Department of State’s version and the 1959 edition were derived from an identical text, which was possibly in Polish. However, while the former has a “parent-child” relationship with its original, the 1959 edition is a secondary derivative, which means that it should be considered a “grandchild” of the Polish text.

は じ め に

1977年に邦訳、出版された『フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」』（志水速雄訳、講談社学術文庫）の底本は、訳者「はしがき」によれば、1959年にモスクワの出版所 Госполитиздат から出版された小冊子 *Доклад на закрытом заседании XX съезда КПСС «О культе личности и его последствиях»* である。小冊子の現物は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター等で閲覧することができる。冒頭に記載されているインプリントを見ると、確かに発行年は1959年、出版所はゴスポリトイズダート（国立政治文献出版所）で、その所在地はモスクワのカルーシスカヤ通り15番地、発行部数は100万部となっている⁽¹⁾。

和田春樹東京大学名誉教授はこの小冊子を偽書と断定し、次のように述べている⁽²⁾。「1970年代にソ連で、1959年に国立政治文献出版所から出版されたというパンフレット、偽書が西欧の書店に現れ、粗忽な専門家が本物と思い込むこともあった。志水速雄訳『フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」』（講談社学術文庫、1977年）は、そのような誤解の産物である」。

和田は、1959年版『フルシチョフ秘密報告』がいかなる点で偽書なのかを明らかにしていない。しかし、同書の体裁に不審な点があるのは確かである。和田と同じように1959年版偽書説を唱える下斗米伸夫法政大学教授は、同書が偽書である根拠として、1959年のソ連の出版目録に該当する書籍がないこと、また、1959年版の扉頁に記載されている出版所の名称 ГОСУДАРСТВЕННЫЕ ИЗДАТЕЛЬСТВО ПОЛИТИЧЕСКОЙ ЛИТЕРАТУРЫ に文法上のミスが見られることを指摘している。下斗米はまた、ソ連の出版物で発行部数が100万部というのはあり得ないとも指摘している⁽³⁾。

1959年版を偽書とする説は、もしそれが書籍の作りないし体裁を念頭に置いているの

⁽¹⁾ 北海道大学「スラブ・ユーラシア研究センター」（当時は「スラブ研究施設」）が問題の小冊子を受け入れたのが1976年3月であることや訳書（講談社学術文庫版）の刊行が1977年であることに鑑みると、この小冊子が実際に印刷されたのは恐らく1975～76年ごろだったのではないかと推測される。したがって、この小冊子は「自称1959年版」と称するべきかもしれないが、本稿では便宜的に「1959年版小冊子」または単に「1959年版」などと呼ぶことにする。

⁽²⁾ 和田春樹『スターリン批判 1953～56年』作品社、2016年、311頁。

⁽³⁾ メドベージェフ、ロイ、ジョレス・メドベージェフ『フルシチョフ権力の時代』下斗米伸夫訳、御茶の水書房、1980年、232頁、訳註（19）。

であれば、妥当と言わなければならない。というのもこの小冊子は、西ドイツの亡命白系ロシア人団体 NTS の企画にもとづき、NTS の別組織ポセフ社によって印刷されたものであることが、佐瀬昌盛防衛大学校名誉教授の研究により突き止められているからである⁽⁴⁾。

問題は小冊子のテキスト（本文）である。それは、1956 年の第 20 回ソ連共産党大会でフルシチョフ（Никита Хрущёв）第 1 書記がおこなった非公開の報告と無関係の、荒唐無稽な内容なのだろうか。それとも、実際の報告を反映しているのだろうか。これについて言及している研究者は筆者の知る限りほとんどいない。例外は佐瀬だけであろう。佐瀬は、1959 年版小冊子を 1989 年にソ連共産党が公式発表したテキスト⁽⁵⁾と比べると、異同はわずかと指摘している⁽⁶⁾。

本稿では、1959 年版の本文が 1989 年公式版と比較して具体的にどのように異なっているのかを検証したい。その際、1956 年の米國務省版との比較も試みたい。そのような照合作業を経て、従来明らかでなかったこと、すなわち以下の点が判明するであろう。(1) 1959 年版小冊子が（米國務省版についても同じことが言えるが）、フルシチョフが第 20 回党大会後の 3 月 1 日に党中央委員会幹部会に提出した版の一変種であること、(2) 1959 年版の本文と 1989 年版のそれとの間には、日本語に訳すとほぼ同じ意味になるようなレベルでの単語の異同が多数見られること、(3) 1959 年版の本文の「精度」ないし「正確性」が全体的には米國務省版よりわずかに劣る程度であること——このうち (2) と (3) については、その原因を考察する必要がある。

1. 比較対象となる「フルシチョフ秘密報告」各版の位置づけ

(1) 1989 年公式版「フルシチョフ秘密報告」

最初に説明しておかねばならないことがある。それは 1959 年版の比較の対象となる 1989 年公式版の位置づけである。というのも、いわゆるフルシチョフ秘密報告のオリジナル・ロシア語版は、実は複数存在するからである。なぜそのようなことになったのか。案文が多数の人物の手で数次にわたる改訂を経て作成されたからである。和田の説明⁽⁷⁾によると、まず、最初の案文の作成は 1956 年 2 月 13 日に始まり、2 月 18 日までに完了した（ポスペロフ案）。続いてフルシチョフが口述筆記させた補足案が 2 月 19 日にできあがった。さらに、フルシチョフ案の中にポスペロフ案を組み込む作業がおこなわれた。これにシェピーロフ（Дмитрий Шепилов）中央委員会書記、スースロフ（Михаил Суслов）中央委員会幹部会会員が手を加えて完成したのが最終報告案である。フルシチョフは報告演説をするために 1956 年 2 月 25 日未明に登壇したとき、最終報告案に微調整を加えた原稿を携えていた。フルシチョフが携えていた版を 2 月 25 日版と称することにしよう⁽⁸⁾。

(4) 佐瀬昌盛「スターリン批判をめぐる半世紀前の情報戦と日本の無邪気」『中央公論』2006 年、11 月号、253 頁。

(5) *Известия ЦК КПСС*, №3, 1989 г., стр.128-170.

(6) 佐瀬, 前掲書, 254 頁。

(7) 和田, 前掲書, 307-309 頁。

(8) 2 月 25 日版のテキストは以下の資料集に収められている。Доклад Н.С. Хрущева о культе личности Сталина на XX съезде КПСС. Документы. Москва: РОССПЭН, 2002 (<http://www.coldwar.ru/hrushchev/doklad-pervogo-sekretarya%20hrusheva.php> 2020 年 2 月 2 日閲覧)。

しかしフルシチョフは壇上で、2月25日版を100パーセント原文どおりに読み上げたわけではない。報告演説の途中、調子に乗ったフルシチョフは、報告の終盤3カ所で原稿から脱線しアドリブ発言をおこなっている。フルシチョフは党大会後の3月1日、みずからのアドリブ発言を補足したテキストを、党中央委員会幹部会に提出した。そこにはアドリブ発言の他に、「場内、憤激のあまりざわめく」「拍手」などの大会出席者の反応も付け加えられていた⁽⁹⁾。本稿において1959年版の比較の対象として取り上げる1989年公式版は、この3月1日編集版に他ならない⁽¹⁰⁾。

急いで付け加えなければならないが、3月1日編集版に書き込まれた大会出席者の反応は、実態を反映するものではない。大会出席者は実際には、恐らく驚愕のあまりであろう、静まりかえっていた⁽¹¹⁾というのが真相である。補足されたフルシチョフのアドリブ発言についても、それが実際の発言を正確に再現しているという保証はない。というのは、フルシチョフの報告に際して速記はおこなわれなかったからである⁽¹²⁾。速記録が存在しない以上、加筆修正の作業は恐らく、報告者フルシチョフ本人がみずからの記憶を頼りにおこなったのであろう。それがどこまで正確かは確かめようがない。

いずれにせよ、3月1日編集版（すなわち1989年公式版）を2月25日版と照らし合わせると、フルシチョフがアドリブで述べた事項は、次のとおりに特定される⁽¹³⁾。(1)ブルガーニン(Николай Булганин)がかつてスターリン(Иосиф Сталин)について述べた感想⁽¹⁴⁾、(2)都市や公共機関に為政者の名前を冠するという慣行に対する批判⁽¹⁵⁾、(3)スターリン批判を公にすることに対する戒め⁽¹⁶⁾。これら3点を含むならば、そのテキストは3月1日編集版の一種として分類できる。1959年版小冊子はそれらの部分を遺漏なく含んでいる(57, 59-60, 60頁)。それは志水速雄訳(講談社学術文庫版)でも確認できる(135, 141-142, 142頁)。要するに、1959年版は1956年3月1日編集版(=1989年公式版)から派生しているということである。

なお、(3)については、1989年公式版と1959年版の原文比較に際し、詳しく異同を調べる(本稿68-69頁)。

(2) 米國務省版「フルシチョフ秘密報告」とその底本

次に、米國務省版「フルシチョフ秘密報告」(1956年)についても簡潔に紹介しておこう。まず、米國務省版とは、1956年6月4日に米國務省が公表し、翌5日のニューヨーク・タイムズ紙に掲載された英文テキストを指す。米國務省版の底本は和田が指摘するとおり、3月1日編集版である⁽¹⁷⁾。このことは容易に確認できる。なぜなら、ニューヨーク・

⁽⁹⁾ 前掲 Доклад Н.С. Хрущева, Документы の編纂者前書き (<http://www.coldwar.ru/hrushev/arheologicheskoye-predisloviye.php> 2020年2月2日閲覧)。

⁽¹⁰⁾ このことは、1989年版テキストの末尾に付された編集部註の1によって確認できる(Известия ЦК КПСС, №3, 1989 г., стр.166)。

⁽¹¹⁾ 前掲 Доклад Н.С. Хрущева, Документы の編纂者前書き。

⁽¹²⁾ 1989年版「フルシチョフ秘密報告」の註の1による(Известия ЦК КПСС, №3, 1989 г., стр.166)。

⁽¹³⁾ 和田, 前掲書, 312-313頁。

⁽¹⁴⁾ Известия ЦК КПСС, №3, 1989 г., стр.163。

⁽¹⁵⁾ Известия ЦК КПСС, №3, 1989 г., стр.164。

⁽¹⁶⁾ Известия ЦК КПСС, №3, 1989 г., стр.165。

⁽¹⁷⁾ 和田, 前掲書, 315頁。

タイムズ紙に掲載された英文テキストは、フルシチョフのアドリブ発言を遺漏なく収め、かつ大会出席者の反応も書き込んであるからである。このことは、米國務省版が 1959 年版と共通のテキストから派生しているということを意味している。

米國務省版はどのような経路で流出したのであろうか。ニューヨーク・タイムズ紙編集部がフルシチョフ秘密報告の冒頭に付したごく短い注釈 (p.13) によれば、米國務省版はソ連共産党から各国の共産党に配布されたテキストにもとづいているという⁽¹⁸⁾。流出の舞台がポーランドであったことは確実視されている。1990 年代半ばの各種報道では、ユダヤ系ポーランド人記者ヴィクトル・グラエフスキ (Wiktor Grajewski) がポーランド統一労働者党のオフィスから持ち出した冊子を、米國務省版の原テキストと見なしている⁽¹⁹⁾。そのうちエルサレム・ポスト紙は、グラエフスキが持ち出したテキストはロシア語であったと推定している。そうだとすると、ニューヨーク・タイムズ紙に掲載された英文はロシア語から直接翻訳されたことになる。

だが、「フルシチョフ秘密報告」の流出経路は、グラエフスキ・ルート以外にもあったとする説もある。たとえばテルアビブ大学のマティティアフ・メイゼル (Matitiah Mayzel) 教授はそのような説を支持し、しかも、ニューヨーク・タイムズ紙が最初に入手したのはグラエフスキ・ルート以外の経路で届いたテキストであると示唆している⁽²⁰⁾。そうだとすれば、米國務省版の原テキストはグラエフスキの入手したテキストとは別物である可能性もある。

このような見方を支持するかのように、ポーランド統一労働者党幹部が「フルシチョフ秘密報告」をニューヨーク・タイムズ紙に提供したとする説を紹介する研究者もいる⁽²¹⁾。それによると、第 20 回ソ連共産党大会の際にビェルト (Bolesław Bierut) ポーランド統一労働者党第 1 書記に与えられたロシア語版 (赤い表紙に「印刷不可」の印) は、党幹部に回覧するためにポーランド語に翻訳された。このポーランド語版は青い表紙で、ポーランド統一労働者党を発行者として明記した上で発行された。発行部数は公称 3,000 部であったが、実際にはその 5 倍 (すなわち 15,000 部) 印刷された。刷り上がったポーランド語版うちの一部が、ポーランド統一労働者党のワルシャワ市委員会第 1 書記を務めていたステファン・スタシェフスキ (Stefan Staszewski) によって、ニューヨーク・タイムズ紙 (およびルモンド紙とヘラルド・トリビューン紙) の特派員に提供された。

このポーランド語版が米國務省版の原テキストだとすると、米國務省版は英語とロシア語との間にポーランド語をはさむ重訳ということになる。本稿筆者は、米國務省版は重訳である可能性が高いと考えている。それについては後で述べる (本稿 69-70 頁)。

⁽¹⁸⁾ 文言を直訳すると、次のとおりである。「国務省では、この版がソ連国外の共産党の指導部のために準備されたものであると理解している」。

⁽¹⁹⁾ 以下の文献は、グラエフスキが「フルシチョフ秘密報告」流出の「実行犯」と見る点では一致している。しかし、テキストがグラエフスキの手から離れた後米國務省に渡った経緯については説明が若干異なっている。“The leak of the century,” *Washington Post*, p.C5, March 27, 1994; “The man who touched history,” *Jerusalem Post*, pp.18-20, November 17, 1995; Dan Raviv and Yossi Melman, *Friends in Deed: Inside the U.S.-Israel Alliance, 1948-1994*, pp.66-69, Hyperion, New York, 1994.

⁽²⁰⁾ Mayzel, Matitiah, “Israeli Intelligence and the leakage of Khrushchev’s Secret Speech,” *Journal of Israeli History*, Sep. 2013, Vol.32 Issue2 (online edition), p.21.

⁽²¹⁾ Kemp-Welch, Tony, “Khrushchev’s ‘Secret Speech’ and Polish politics: The Spring of 1956,” *Europe-Asia Studies*, March 1996, Vol.48 Issue2, p.189.

2. テキスト本文の比較

すでに述べたとおり、1959年版は1956年3月1日版から派生していることが分かった。そうである以上、1959年版が1989年公式版からかけ離れたものにはなり得ないことは予想がつく。しかし、これまで両者の本文の実証的な比較は試みられたことがない⁽²²⁾。以下、そうした比較作業によって、1959年版の本文が1989年版のそれと比べていかなる特徴をそなえているのかを明らかにしたい。それができれば、この版が直接依拠しているはずのテキストを推定できるかもしれない。少なくとも、そのための手がかりは得られるかもしれない。

(1) 1959年版小冊子でのみ使われている小見出し

さて、本論に入ろう。まず、1959年版小冊子に存在していて1989年公式版には存在しないものを確認しよう。二つのテキストを読み比べて目につくのは、小見出しの有無である。59年版小冊子では小見出しが使われているのに対し、1989年版にはそのような小見出しは見当たらない。1959年版の小見出しを以下に漏れなく列挙してみよう。丸括弧内に講談社学術文庫版の訳語を補っておく。

КУЛЬТ ЛИЧНОСТИ И КЛАССИКИ МАРКСИЗМА (個人崇拜とマルクス主義の創始者たち)

ЛЕНИН О СТАЛИНЕ (レーニン、スターリンを語る)

«ВРАГИ НАРОДА» («人民の敵」)

ЛЕНИН И ПАРТИЙНАЯ ОППОЗИЦИЯ (レーニンと党内反対派)

КОЛЛЕКТИВНОЕ РУКОВОДСТВО (集団指導)

ФАБРИКАЦИЯ ДЕЛ (事件の捏造)

ОТВЕТСТВЕННОСТЬ ЗА ТЕРРОР (テロルに対する責任)

СТАЛИН И ВОЙНА (スターリンと戦争)

ГЕНОЦИД И ТЕРРОР (民族大虐殺とテロル)

КОНФЛИКТ С ЮГОСЛАВИЕЙ (ユーゴスラヴィアとの紛争)

ТЕРРОР (テロル)

БЕРИЯ (ベリヤ)

«КРАТКАЯ БИОГРАФИЯ» (『スターリン小伝』)

КУЛЬТ ЛИЧНОСТИ И ЕГО ВРЕД (個人崇拜とその害毒)

これらの小見出しは1989年の公式版では用いられていない。下斗米はこれらの小見出しについて、「ジャーナリスティックな小見出しなど、党の公式文書ではありえない」と指摘している⁽²³⁾。

(2) 1959年版小冊子に見られるセンテンスおよびフレーズの欠落

次に、センテンス単位で二つのテキストを比較してみよう。まず、1959年版小冊子に

⁽²²⁾ 筆者はそのような比較作業の第一歩として、1989年公式版「フルシチョフ秘密報告」の全訳を試みた。『防衛大学校紀要』社会科学分冊、第119・120合併輯、2020年3月、1-91頁。

⁽²³⁾ メドベージェフ、前掲書、232頁、訳註(19)。

存在していて 1989 年公式版で欠けているセンテンスはあるだろうか。調べてみると、その種の欠落はないように思われる。逆に、公式版に存在していて 59 年版小冊子で欠落しているセンテンスはあるだろうか。数は少ないがある。たとえば、フルシチョフがエイヘという人物の供述書を引用している場面。エイヘは、スターリンによる肅正の過程で偽りの証言を強いられ、処刑された人物である。以下の引用文のうちゴシック体の部分に注意されたい。そこは、59 年版小冊子では欠落している。

1989 年公式版, 141 ページ (1959 年版 24 ページの下から 4 行目) (亀甲括弧は訳者による補足。斜線は改行の意) : 1935 年にブハーリンが創設したとされる「予備本部」の議長についても同じようなことが起こりました。**最初、私〔エイヘ〕は、「予備本部」の議長は自分が務めていたと認めたのですが、後になって「メジュラウクが議長をやっていたことにしろ」と提案されました。同様の場面は他にもたくさんありました…** (Сперва я записал себя, но потом мне предложили записать Межлаука, и многие другие моменты...) / 事件の空白部分の調査を要請して下さるよう切にお願いします。

1959 年版で欠落しているこの一節は、米國務省版にも存在する。念のために原文を示すと以下のとおり。

米國務省版 : At first I wrote my name in and then I was instructed to insert Mezhlauk. There were other similar incidents (p.14, 左から 6 段目の column)

1989 年版に存在するセンテンスが 1959 年版小冊子で欠落している例は、他にも散見される。以下の引用文のうちゴシック体部分がそれである。ゴシック体部分は 1959 年版小冊子には見当たらない。

1989 年公式版, 154 ページ (1959 年版小冊子 43-44 ページ) : 「小指をぴくりと動かす」という行為は、高くついた。そのような発言はスターリンの誇大妄想を反映していた。なにしろスターリンはまさにそのとおりに行動していたのだから。「小指をぴくりと動かす。すると、コシオールが消え失せる。**もう一度同じことをする。すると、もうポスティシェフとチュバリがいなくなる** (шевелину еще раз мизинец — и нет уже Постышева, Чубаря,...)。またもう一度同じことをする。今度はヴォズネSENSキー、クズネツォフその他大勢の活動家がいなくなる」。

米國務省版には 1959 年版のような欠落はない。念のために当該部分を挙げると、以下のとおり。

米國務省版 : “I will shake my little finger once more and Postyshev and Chubar will be no more”(p.15, 一番右の column の 15-18 行目)

1959 年版小冊子において、1989 年公式版のセンテンスの一部 (つまりフレーズ) が欠落しているケースはどうか。多くはないが、幾つかは観察される。ついでに言うと、逆のパターン (59 年版小冊子で使われているフレーズが 89 年公式版で欠落しているケース) は、見つけられなかった。

以下に示す例では、下線部分 (訳文ではゴシック体) が 59 年版小冊子で見当たらない。ちなみにこの欠落により、センテンスの主語は「ソヴィエト国民の偉業」から「諸国民の

偉業」にすり替わっている。

1989 年公式版, 151 ページ：Величайший подвиг советского народа в Великой Отечественной войне, спасшего сотни миллионов людей Востока и Запада от нависшей над ними угрозы фашистского порабощения, будет жить в памяти благодарного человечества века и тысячелетия. (下線は引用者) (ファシストへの隷属という危機から東西の何億人もの人々を救った大祖国戦争におけるソヴィエト国民の偉業は、感謝の念にあふれた人類の記憶の中でこの先何百年も何千年も生き続けるであろう。)

1959 年版小冊子, 39 ページ：Огромные и героические подвиги сотен миллионов народов Востока и Запада во время борьбы против угрозы фашистского порабощения, которая висела над нами, будут жить в веках и тысячелетиях в памяти благодарного человечеств. (ファシストへの隷属という危機に立ち向かった際の、東西の数億人の諸国民の大いなる英雄的偉業は、感謝の念にあふれた人類の記憶の中に、何百年、何千年も生き続けるであろう。)

米国務省版にも 1959 年版小冊子と同様の「間違い」が見られる。以下に掲げておく。

米国務省版：The magnificent and heroic deeds of hundreds of millions of people of the East and of the West during the fight against the threat of fascist subjugation which loomed before us will live centuries and millennia in the memory of thankful humanity. (p.15, 左から 6 段目の column の第 4 段落)

もう一つ同様の例を以下に挙げよう。ゴシック体で示した部分は、59 年版小冊子では欠落している。原文は省略する。亀甲括弧は訳者による補足である（以下、同様）。

1989 年公式版, 163 ページ：スターリンはある対談でポストイシエフに対する不満をあらわにし、次のように問うた。「あなた (вы) は一体何者なのかね」。／ポストイシエフはいつもの、**O**を文字どおりに「**オ**」と発音する〔**レニングラード風の**〕な**まり**で決然と答えた。「ポリシェヴィキです、同志スターリン、ポリシェヴィキです！」。

1959 年版, 57 ページ：スターリンはある発言において、ポストイシエフに対する不満を表明し、次のように問うた。「お前さん (ты) は一体、何者だ」。／ポストイシエフは決然と答えた。「私はポリシェヴィキです、同志スターリン、ポリシェヴィキです」。

この一節に関して言うと、米国務省版は 1959 年版小冊子と同じである。すなわち、「いつもの、O を文字どおりに「オ」と発音するなまりで」というフレーズはない。具体的には、次のような表現になっている。Postyshev answered clearly, “I am a Bolshevik, Comrade Stalin, a Bolshevik.” (p.16 の左から 6 段目の column。下半分の真ん中あたり)

以上、主としてセンテンスおよびフレーズの単位での食い違いに着目しつつ、1959 年小冊子のテキストを 1989 年公式版と比較した。1989 年版には存在するのに 1959 年版において欠落しているセンテンスおよびフレーズが幾つかあることが分かった。しかし、その数はそれほど多いわけではない。

全体的に見た場合、以下で説明するとおり、多いのは単語レベルの異同（すなわち、相互に異なる単語が使われているケース）である。しかしその種の異同は、若干の例外を別

とすれば、日本語に訳すと差が曖昧になる。異同と言っても、その程度の異同ということである。

(3) 和訳すれば差がなくなる程度の、微妙な単語の異同

単語の異同の実例を挙げよう。全体の中で特によく似た箇所を選んだわけではない。両テキストの違いの「平均値」を示している箇所である。

1989 年公式版, 129 ページ: Ленин с гордостью говорил о большевистской, коммунистической партии, как вожде и учителе народа, он постоянно призывал выносить на суд сознательных рабочих, на суд своей партии все важнейшие вопросы; он заявлял: «ей мы верим, в ней мы видим ум, честь и совесть нашей эпохи» (Соч., т. 25, стр. 239). (レーニンとは、ポリシェヴィキの共産党は人民の統領にして教師であるとして、誇らしく語った。レーニンはすべての最重要の問題を、自覚的な労働者とその党の審判に付するよう、絶えず呼びかけた。レーニンは述べた。「我々は党を信じ、党の中に現代の英知と名誉、良心を見出す」。)

1959 年版小冊子, 5 ページ: Ленин с гордостью говорил о коммунистической партии большевиков, как о вожде и учителе народных масс; он постоянно призывал выносить все наиболее важные вопросы на рассмотрение сознательных трудящихся и их партии. Ленин говорил:) «Мы верим в это, мы видим в ней мудрость, честь, и совесть нашей эпохи». (レーニンは、共産党ポリシェヴィキ派は人民大衆の統領にして教師であるとして、誇らしく語った。レーニンはすべての最重要の問題を、自覚的な勤労者とその党の討議にかけよう、絶えず呼びかけた。レーニン言った。「我々は党を信じ、党の中に現代の英知、名誉、良心を見出す」。)

二つのテキストの表現は相互に微妙に異なるが、基本的にはよく似ていると言っても差し支えないだろう。まず、文と文の順番について両者に違いはない。それは日本語訳を一読すれば明らかである。もちろん単語レベルでの異同はある。しかし、日本語に訳すと異同はほとんど分からなくなる。異なる点を順に見ていこう。①「共産党」の表現。89 年公式版で большевистской, коммунистической партии となっているのに対し、59 年版小冊子では коммунистической партии большевиков。言い回しが異なると言っても、直訳すればいずれも「ポリシェヴィキの共産党」となる。②89 年公式版で「人民の」народа が、59 年版で「人民大衆の」народных масс となっているが、相互に入れ替え可能であろう。③「最重要の問題」は、89 年公式版では合成式最上級が使われているのに対し、59 年版小冊子では単一式最上級が使われている。どちらも日本語に訳せば「最重要の問題」になる。この他にも、④「英知」の意味の ум (公式版) と мудрость (59 年版) などの違いがあるが、日本語に訳してしまえば違いはほぼ消えてしまう。

差違がいくぶん鮮明な箇所としては、59 年版の「討議にかけよう」(выносить на рассмотрение) と 89 年版の「審判に付する」(выносить на суд) であろう。89 年版の方が幾らか格調が高いように思われる。もう一つ、最後の、レーニンの発言の直接引用の切り出し方。ここは伝達動詞が異なる。59 年版は日常用語の говорил が使われている。89 年版は、それよりやや硬く заявлял となっている。

この一例からも分かるように、二つのテキストの間に見られる単語レベルの異同は、日本語に訳せばほとんど差がなくなってしまう程度の違いである。このことは他の箇所についても当てはまる。実例をもう一つ挙げてみよう。(ボールド体は引用者による)

1989 年公式版, 131 ページ : Мы должны серьёзно разобрать и **правильно** проанализировать этот вопрос для того, чтобы исключить всякую возможность повторения даже какого-либо подобия того, что имело место при жизни Сталина, который проявлял полную нетерпимость к коллективности в руководстве и работе, допускал грубое насилие над всем, что не только противоречило ему, но что казалось ему, при его капризности и деспотичности, противоречащим его установкам. (我々はこの問題を真剣に検討し、**正しく**分析しなければならない。それは、スターリンの存命中に起こったのと似たことが再燃する可能性をすべて排除するためである。スターリンは、指導と活動における集団主義に対してまったく不寛容であった。そして、自分と対立する事柄についてばかりか、みずからの恣意と専断に溺れて相手の意見が自分の方針と対立していると思ひ込んだあらゆる事柄についても、粗暴な暴力をふるった。)

1959 年版小冊子, 8 ページ : Мы должны серьёзно рассмотреть и проанализировать этот вопрос для того, чтобы мы могли предупредить всякую возможность повторения в какой-либо форме того, что имело место при Сталине, который абсолютно не терпел коллективности в руководстве и в работе и который практиковал грубое насилие не только по отношению ко всему, что противоречило его мнению, но также и по отношению к тому, что по мнению его капризного и деспотического характера, казалось, не соответствовало его взглядам. (我々はこの問題を真剣に検討し、分析しなければならない。それは、スターリン時代に起こったことが何らかの形で再燃する可能性をすべて封じられるようにするためである。スターリンは指導と活動における集団主義にはまったく我慢ができなかった。また、自分の意見と対立する事柄についてばかりか、恣意的で専制的な性格の考え方に突き動かされて自分の見解と合致しないと思ひ込んだあらゆる事柄についても、粗暴な暴力をふるった。)

1959 年版小冊子のテキストは 1989 年公式版と比較すると、単語レベルでの異同はあっても意味内容については公式版の言わんとするところを (правильно に相当する単語がないことを除けば) よく伝えていると評するべきであろう。たとえば、①「可能性を排除する」は「可能性を封ずる」に、②「まったく不寛容であった」は「まったく我慢できなかった」に、③「みずからの恣意と専断に溺れて」は「恣意的で専制的な性格の考え方に突き動かされて」に、それぞれ言い換えられている。言い換えられてはいるが、公式版テキストの言わんとするところはほぼ問題なく伝わるであろう。

参考までに米国務省版を掲げると、以下のとおり。「正しく」に相当する単語 **correctly** が入っているのが分かる (ボールド体は引用者による)。

We have to consider seriously and analyze **correctly** this matter in order that we may preclude any possibility of repetition in any form whatever of what took place during the life of Stalin, who absolutely did not tolerate collegiality in leadership and in work, and who practiced brutal violence, not only toward everything which opposed him, but also toward that

which seemed, to his capricious and despotic character, contrary to his concepts. (p.13 の左から 4 段目の column. 最後の段落)

同様の例をさらにもう一つ挙げよう。今度は、まず 89 年公式版の一節を日本語に訳し、次にそれを、1959 年版のテキスト見ながら添削してみた。

1989 年公式版 135 頁： При этом обнаружилась весьма неприглядная картина грубого произвола, связанного с неправильными действиями Сталина. Как показывают факты, Сталин, воспользовавшись неограниченной властью, допускал немало злоупотреблений, действуя от имени ЦК, не спрашивая мнения членов ЦК и даже членов Политбюро ЦК, зачастую не ставя их в известность о единолично принимаемых Сталиным решениях по очень важным партийным и государственным вопросам. (その際明らかになったのは、スターリンの不正な行動と関連する由々しい専横の、醜惡な真相である。事実が示しているように、スターリンは無制限の権力を享受し、少なからぬ権力濫用をやった。その際、党中央委員会の名において行動しながら、中央委員会はもとより政治局のメンバーの意見すら求めなかった。また、党および国家の重要案件について独断で下した決定について中央委員会および政治局のメンバーに何も知らせないことも多かった。)

1959 年版小冊子 14 頁： При этом была вскрыта страшная картина всего произвола, тесно связанного с неправильным поведением Сталина. Факты доказывают, что Сталин, постоянно злоупотребляя своей неограниченной властью, действовал при этом от имени ЦК, не спрашивая при этом мнения не только членов ЦК, но даже и членов Политбюро. Нередко, он не информировали их о лично им принятых решениях, касавшихся чрезвычайно важных партийных и государственных вопросов. (上記訳文を 1959 年版小冊子に照らして添削：その際明らかになったのは、スターリンの不正な行動と**緊密に**関連する**由々しい**専横**全体**の、醜惡な**恐ろしい**真相である。事実が示しているように、スターリンは無制限の権力を享受し、~~少なからぬ権力絶えず~~濫用を**や**ってのけた。~~その際、~~し、党中央委員会の名において行動しながら、中央委員会はもとより政治局のメンバーの意見すら求めなかった。また、党および国家の重要案件について独断で下した決定について、中央委員会および政治局のメンバーに何も知らせないことも**多かった****稀ではなかった。**)

以上の 3 個の例に照らすなら、1959 年版小冊子が 1989 年公式版のヴァリエント(異本)であることは明らかである。

(4) その他の注目すべき異同

しかし、異同があるのは事実である。まず、タイトルからして異なっている。1959 年版小冊子のタイトルは、ДОКЛАД НА ЗАКРЫТОМ ЗАСЕДАНИИ XX СЪЕЗДА КПСС «О культе личности и его последствиях»となっているのに対し、1989 年公式版では以下のとおりとなっている。О КУЛЬТЕ ЛИЧНОСТИ И ЕГО ПОСЛЕДСТВИЯХ Доклад Первого секретаря ЦК КПСС тов. Хрущева Н. С. XX съезду Коммунистической партии Советского

Союза。公式版では「秘密報告」ではなくて、「フルシチョフの報告」となっているのが分かる。

また、単語レベルの異同であっても、無視することのできない異同もある。まず、一個余計な単語が入ったために意味が公式テキストと逆になっている箇所がある（ただし、そのような例は一つだけ）。原文の当該の単語はボールド体に、訳文のそれはゴシック体にした。

1989 年公式版, 153 ページ：Как только Сталин получил от Берия и Абакумова некоторые материалы, он, не разобравшись по существу в этих фальшивках, дал указание расследовать «дело» Вознесенского и Кузнецова. И этим уже была предрешена их судьба. (スターリンは、ヴォズネSENSキーとクズネツォフの「事件」を審理するよう命じた。)

1959 年版小冊子, 42 ページ：Когда Сталин получил от Берия и Абакумова материалы, он, не пересмотрев эти клеветнические материалы, приказал **прекратить** дальнейшее расследование «дела» Вознесенского и Кузнецова. Это решило их судьбу. (スターリンは、ヴォズネSENSキーとクズネツォフの「事件」の、以後の審理を打ち切れと命じた。)

参考までに米国務省版を確認すると、1989 年公式版とほぼ同じであることが分かる。

When Stalin received certain material from Beria and Abakumov, without examining these slanderous materials he ordered an investigation of the “affair” of Voznesensky and Kuznetsov. With this, their fate was sealed. (p.15 の左から 7 段目の column。上半分の真ん中あたり)

単語レベルとはいえ無視できない異同は、他にも観察される。たとえば、スターリンが独ソ戦の直前、ドイツからの攻撃はあり得ないと判断して油断していた場面に関して、微妙な、だが興味深い食い違いが見られる。フルシチョフは、スターリンが油断していた証拠としてベルリン駐在海軍武官 (военно-морской атташе в Берлине) からの電報を取り合わずにいたことを指摘している。この海軍武官は 1989 年版では капитан 1-го ранга Воронцов となっており、日本語に訳せばまぎれもなく「ヴォロンツォフ海軍大佐」である。1959 年版小冊子では、この武官は военным атташе капитаном Воронцовым となっている。これは単純に受け止めるなら「ヴォロンツォフ陸軍大尉」である。しかし、капитан という言葉が「海軍の佐官」の意味でも使われることと、また武官を務めるのが通常大佐であることなどを考え合わせると、капитан 一語で「海軍大佐」の意味であると解釈することは不可能ではない。問題の箇所の日本語訳を、原語を括弧に収めて以下に示そう。ゴシック体は訳者による。

1989 年公式版, 146 ページ：たとえば、ベルリン駐在の**海軍武官** (военно-морской атташе) **ヴォロンツォフ大佐**は 1941 年 5 月 6 日付けのベルリンからの電報において、次のように報告している。「ソヴィエト市民ボゼルが小官 (нашего морского атташе) の補佐官に伝えてきたところによると、ドイツは」云々。

1959 年版小冊子, 32 ページ：たとえば、1941 年 5 月 6 日、ベルリン駐在のソヴィエト大使館付**武官ヴォロンツォフ海軍大佐** (советским военным атташе капитаном

Воронцовым) が送ってきた報告には、次のように述べられていた。「ソヴィエト市民ボゼルが大使館付海軍武官の代理 (заместителю) に通報してきたところによると、ドイツ軍は」云々。

このようにこの箇所は日本語に訳してしまえばそれほど食い違っているわけではないが、しかし、ヴォロンツォフの肩書が海軍大佐であるのなら、1959 年版の言葉の使い方はやや不正確であり、誤解を招きかねない。59 年版の記述には他にも不自然なところがある。それは武官の「代理」である。これは見かけない表現である。日本語に訳せば「代理」も「補佐官」も同じようなもの感じられるかもしれないが、ロシア語の заместитель はナンバー 2 を指す単語であって、補佐官 помощник のことではない。ちなみに、米國務省版は 1959 年版小冊子と同じで、武官の氏名および肩書きを Captain Vorontsov としている。また、市民ボゼルの通報を受けた者を、the deputy naval attache としている (p.15 の 2 段目の column。上半分の真ん中あたり)。

1959 年版小冊子と 1989 年版公式版との間には、引用文の扱いをめぐる微妙な食い違いも観察される (ただし、それは一例だけである)。具体的に述べると、フルシチョフが引用している党活動家の発言の一部が、1959 年版小冊子ではフルシチョフ自身の言葉であるかのように記述されている。ここには、編者の解釈の違いが反映されている。以下、公式版を訳してみよう。掲げる引用文はすべて、スネゴフというかつてザカフカス地方で活躍していた活動家の発言である。ちなみに、スネゴフは 1938 年に弾圧され、1954 年に名誉回復を果たした。

1989 年公式版, 156 ページ (1959 年版小冊子では 46 ページ) (斜線は改行の意) :

この問題における重要な事実を再現し、それを党中央委員会に伝えることが必要不可欠だと判断する。というのも、それを審理調書に盛り込むことは不適切だと考えるからだ。／1931 年 10 月 30 日、全ソ共産党中央委員会組織局の会議の席上、ザカフカス地方委員会カルトヴェリシヴェリの報告が行われた。〔中略〕二日後、決定が下された。それにより、ベリヤは党の役職に就くことになった。カルトヴェリシヴェリはザカフカスから追放されることになった。

このことは、その会議に出席していた同志ミコヤンとカガノーヴィッチから裏づけをとることができる。／広く知られていたことであるが、カルトヴェリシヴィリとベリヤは長年にわたり敵対関係にあった。それは、同志セルゴがザカフカス地方で勤務していた時期に始まった。発端は、カルトヴェリシヴィリがセルゴの側近中の側近だったことにある。ベリヤにしてみれば、そのような敵対関係は、カルトヴェリシヴィリを陥れるべく「事件」を捏造するための理由となった。／カルトヴェリシヴィリはこの「事件」に関し、ベリヤに対するテロ行為のかどで告発された。ここに、事件の性格がよく表われている。

以上の引用文は、公式版では、すべてスネゴフの発言として扱われているが、59 年版小冊子では、二段落目の「このことは、その会議に出席していた同志ミコヤンとカガノーヴィッチから裏付けを取ることができる」から以後は、引用文ではなく地の文 (すなわち、フルシチョフ自身の言葉) として扱われている。

ちなみに、1959 年版小冊子の「間違い」は、米國務省版のそれより軽微と言えるかも

しれない。というのも、米 국무省版では、冒頭の「この問題における」から以降、すべてフルシチョフ自身の言葉として扱っており、「間違い」の度合いは 1959 年版小冊子より大きいからだ。(p.16 の一番左の column の下半分)。

日付などの数字についても微妙な違いが見られる。一例として、独ソ戦直前のスターリンの無為無策ぶりについてのフルシチョフの描写が挙げられる。以下、日本語に訳して引用しよう。ゴシック体は引用者による。

1989 年公式版, 148 ページ：次のような事実も知られている。ヒトラーの軍隊がソ連領にまさに侵入する直前、あるドイツ人が国境を越えて通報してきた。「ドイツ軍はソ連を攻撃せよとの命令を、**6 月 22 日の午前 3 時に受けた**」と。このことはただちにスターリンに伝えられた。だがスターリンは、このシグナルを意に介さなかった。

1959 年版小冊子, 34 ページ：次のような事実も知られている。ヒトラー軍がソ連領に侵入する前夜、あるドイツ市民が国境を越え、「ドイツ軍はソ連に対する軍事行動を **6 月 21 日の未明, すなわち午前 3 時に開始せよ**との命令を受け取っている」と述べた。これはただちにスターリンに伝えられたが、スターリンはそれに対して何の注意も払わなかった。

日付が異なるばかりか、その日付の係り方が違っている。1989 年版では「6 月 22 日」は、ドイツ軍が攻撃命令を受け取った日であるのに対し、1959 年版では、「6 月 21 日」は攻撃を開始すべき日となっている。ちなみに、ここの「間違い」については米 국무省版も「同罪」である。

The following fact is known: On the eve of the invasion of the territory of the Soviet Union by the Hitlerite army, a certain German citizen crossed our border and stated that the German armies had received orders to start the offensive against the Soviet Union on the night of June 22 at 3 o'clock. Stalin was informed about this immediately, but even this was ignored. (p.15 の左から 3 段目の column。第 3 段落)。

最後に、フルシチョフのアドリブ発言のうち 3 番目のものを取り上げよう。報告の終盤でフルシチョフは、「敵の前で味方の弱みをさらすべきではない」と、スターリン批判の公開を戒めるのであるが、1959 年版を 1989 年公式版と比較すると、言い回しはかなり異なっている。以下、表現の異同が目立つ箇所に下線を施した(訳文ではゴシック体で示した)。ちなみに、この箇所について 1959 年版と米 국무省版との間で表現はほぼ共通している。

1989 年公式版, 165 頁：Надо знать меру, не питать врагов, не обнажать перед ними наших язв. Я думаю, что делегаты съезда правильно поймут и оценят все эти мероприятия. (限度をわきまえておくべきである。**敵を利することのないように、また、敵の前で傷口をさらすことのないようにすべきである**。本党大会の代議員諸君はこれらの措置を正しく理解、評価してくれるだろうと思う。)

1959 年版小冊子, 60 頁：Нам следует знать пределы, мы не должны давать оружие в руки нашим врагам, не должны полоскать наше грязное бельё у них на глазах. Я думаю,

что делегаты съезда поймут и правильно оценят все эти предложения. (限度をわきまえておくべきである。敵の手に武器を渡してはならない、自分の汚れた下着を敵の眼前で濯いではならない。本党大会の代議員はこうした提案をすべて理解し、正しく評価してくれるだろうと思う。)

米國務省版: We should know the limits; we should not give ammunition to the enemy; we should not wash our dirty linen before their eyes. I think that the delegates to the Congress will understand and assess properly all these proposals. (p.16 の最後の column。上半分の真ん中あたり)

下線部分では、1959 年版の表現は 1989 年公式版とかなり異なっている。意味こそ同じだが比喩が異なっているのはなぜか。いったん他の外国語（恐らくポーランド語）に翻訳したテキストをロシア語に訳し直したから、と考えれば説明はつくであろう。

以上のとおり、確かに、公式版と米國務省版のいずれにも存在するセンテンスや語句で、1959 年版で欠落しているものが、若干ではあるが存在する。また、1959 年版で余計な単語が入っているために、公式版（および米國務省版）と意味が逆になっている事例もあった。しかし、全体的に概観した場合、1959 年版小冊子と公式版との間の違いは大きいということが確認された。

3. 1959 年版小冊子と米國務省版との比較にもとづいて推測されること

最後に、1959 年版小冊子と米國務省版との関係について補足説明しておこう。すでに述べたとおり、公式版と米國務省版のいずれにも存在するセンテンスや語句で、1959 年版において欠落しているものがある。しかしそれとは逆に、1959 年版と米國版の言い回しが互いに一致していて、両者と公式版との違いが目立つケースもある。たとえば、先ほど述べたように、「敵を利することのないように、また、敵の前で傷口をさらすことのないようにすべきである」という 1989 年公式版の一節は、1959 年版と米國務省版とではともに次のような表現になっている。「敵の手に武器を渡してはならない、自分の汚れた下着を敵の眼前で濯いではならない」。意味こそ同じだが言い回しにはかなりの違いが見られる。このような違いは何に由来するのだろうか。

この疑問は、1959 年版と米國務省版が同一の外国語テキストからの重訳だったと考えれば説明がつくかもしれない。たとえば、それぞれのテキストが、ポーランド統一労働者党によって作成されたポーランド語訳にもとづいているとしたら、両者の言い回しが互いに一致して 1989 年公式版から乖離するケースがあっても不思議ではあるまい。また、この仮説に従うなら、1959 年版と 1989 年公式版との間に微妙な単語レベルの異同があちこちで散見される理由も説明がつく。

この見方の裏付けとなる材料をもう一つ示そう。それは、1989 年版に出てくる *опрос* という単語である。この単語は 1959 年版および米國務省版においてどのように表現されているだろうか。それを調べると興味深いことが分かる。まず、問題の単語を含む一文を 1989 年版から引用し、訳文と併せて示そう（ボールド体は引用者による）。Как уже отмечалось, многие решения принимались единолично или **опросом**, без коллективного

обсуждения.⁽²⁴⁾「すでに指摘したことだが、多くの決定は独断か、そうでなければ、**опрос**によって下された。集団による討議は経ていなかった」。この **опрос** は前後の文脈に照らすなら、「書面による賛否確認」といったような意味ではないだろうか。しかしそれは、1959 年版と米國務省版ではそれぞれ次のような表現に置き換わっている。**опросом** に相当する部分をボールド体で示そう。

Как мы уже показали, многие решения принимались или одним человеком, или же **обходным путём**, без коллективного обсуждения. (стр. 57)

As we have already shown, many decisions were taken either by one person or **in a roundabout way**, without collective discussions. (p.16 の左から 6 番目の column。一番下の段落)

両者は互いによく似ていて、いずれも次のように訳せる (**опросом** に相当する部分はゴシック体)。「すでに示したとおり、多くの決定は一人の人間によってか、または**迂回的方法**で採択され、集団的討議は経ていなかった」。この部分において 1959 年版と米國務省版は瓜二つであるが、両者は 1989 年版との対比では不正確な表現になっている。ここには、**опрос** の意味を正しく捉えられなかった外国人（つまり非ロシア語話者）の誤訳が反映されているのではないだろうか。1959 年版と米國務省版とが同じ外国語のテキストを底本としているのであれば、そのようなことも起こっても不思議ではない。

しかし、1959 年版と米國務省版が同じ外国語のテキストから訳されているとすると、今度は、両者の間に見られる若干の異同はいかなる原因によるのであろうか。前述したように（本稿 59 ページ）、第 20 回ソ連共産党大会の後、ポーランド統一労働者党によって「フルシチョフ秘密報告」のポーランド語版が多数印刷されたという説がある。そのとき党非公認の写しも多数作られたという⁽²⁵⁾。そうだとすれば、写しに間違いが忍び込む余地はあったであろう。NTS（在西ドイツ亡命ロシア人機関）がその種の写しを利用したとすれば、1959 年版のテキストが基本的に米國務省版によく似ていながら若干精度が低い理由は説明がつくかもしれない。この見方が正しいとすると、1959 年版「フルシチョフ秘密報告」は、公式ポーランド語版の孫バージョンということになる。

ま と め

本稿ではまず最初に、1990 年代半ばの新聞報道や研究成果にもとづき、米國務省版「フルシチョフ秘密報告」がポーランド統一労働者党から流出したテキストを底本としていることを再確認した。次いで、先行研究によって突き止められた 1956 年 3 月 1 日編集版（＝1989 年公式版）と 1956 年 2 月 25 日版との異同を参照することによって、1959 年版小冊子が（米國務省版と同じく）3 月 1 日編集版の一変種であることを明らかにした。

それらの準備作業を経て、1959 年版小冊子のテキストを主に 1989 年公式版と、部分的には米國務省版とも比較照合した。その結果、次のことが分かった。(1) 1959 年版の本文と 1989 年版のそれとの間には、日本語に訳すとほぼ同じ意味になるようなレベルでの

⁽²⁴⁾ *Известия ЦК КПСС*, №3, 1989 г., стр.163.

⁽²⁵⁾ Kemp-Welch, Tony, “Khrushchev’s ‘Secret Speech’ and Polish politics: The Spring of 1956,” *Europe-Asia Studies*, March 1996, Vol.48 Issue2, p.189.

単語の異同が多数見られる。(2) そうした異同にもかかわらず、1959 年版の本文の「精度」ないし「正確性」は、米國務省版よりわずかに劣る程度である。米國務省版と公式版との異同が仮に 5 パーセントとするならば、1959 年版小冊子と公式版との異同は 7 パーセントか 8 パーセント程度である。

最後に、(3) 1959 年版が米國務省版と比べてよく似ていながら若干精度が劣る理由を考察し、次の仮説を立てた。米國務省版と 1959 年版とは同一の底本（恐らくポーランド語）の派生物である。しかし、前者がその底本との間で親子関係にあるのに対し、後者（1959 年版）は底本から二次的に作成された、いわば孫バージョンにあたる——。このように仮定すると、1959 年版の精度が米國務省版にわずかながら劣る理由を説明できるように思われる。

1959 年版「フルシチョフ秘密報告」をめぐる今後の研究課題として、ポーランド統一労働者党が作成した公式ポーランド語版のテキスト（青い表紙）を検証すること、また、米國務省版の原テキストを確認することが求められる。

（本論文は、複数のレフリーによる審査を経て編集委員会が採択した。）